資料市懇第 11-4 号

第 10 回　市民参加懇談会コアメンバー会議
－市民参加による政策検討会議－
議事録

１．日　時：平成 15 年 5 月 21 日（水）　15：30～17：45
２．場　所：中央合同庁舎第 4 号館 7 階　共用 743 会議室
３．出席者：木元座長（原子力委員）、碧海委員、井上委員、小川委員、高木委員、
　　中村委員、吉岡委員
　　（原子力委員会）竹内委員
　　（内　閣　府）大熊政策統括官、榊原参事官、犬塚参事官補佐
４．議　題：（１）これまでの活動のとりまとめについて
　　（２）次回の市民参加懇談会の開催について
　　（３）その他
５．配布資料
　資料市懇第 10-1 号　市民参加懇談会におけるこれまでの活動のとりまとめ
　　について（案）
　資料市懇第 10-2 号　次回の市民参加懇談会の開催計画について（検討用ペーパー）

６．審議事項
（１）これまでの活動のとりまとめについて
○事務局より、資料市懇第 10-1 号について説明。
（木元座長）
・　資料１０－１は、前回お配りした資料に各委員から指摘いただいた点について修正したところがあるが、そう大きい変更はない。もし何かご疑問の点などあったら、ぜひご発言いただければと思うが、いかがか。
・　小川委員から、「参考」の５ページのところで、「情報のあり方」という表題に「公開」という単語を入れて「情報公開のあり方」としてはいかがかというご意見があったが、「情報公開」も含む内容として元のまま「情報のあり方」とさせていただいている。
（小川委員）
・　了解した。
（木元座長）
・　この資料だけを読んだり、報告させていただいたときに、もう少し説明が必要かと思う箇所は出てくるのではないかと思うが、資料を原子力委員会定例会議に報告したときに改めて、これはこういう意味ですという説明は付け加えられると思う。資料には柱となることを書いているということであるが、いかがか。もしご異論がなければ、本資料にてご了承いただきたい。
・　その後の問題として、前回のコアメンバー会議でお諮りしたが、原子力委員会にコアメンバーの方と一緒に報告させていただくということで了解いただいたと思う。報告者の方をどなたにするか、また、原子力委員会の定例会議は毎週火曜日だが、至近のスケジュールとしては５月２７日、６月３日、１０日、１７日、２４日とあ

るうち、どの日にするか。本日のコアメンバー会議の結果報告は５月２７日火曜日、すなわち来週の予定とするか。そのときに活動のとりまとめの報告ができればありがたいと思う。原子力委員会の定例会議は、大体午前１０時半から正午までである。その中の議題の中に入れさせていただこうと思うが、いかがか。

（各委員の５月２７日及び６月３日の都合を確認）

（木元座長）

- ５月２７日は碧海委員が午前中よろしくて、吉岡委員は保留、その他の方々はご都合が悪い。６月３日は高木委員以外はご都合がよろしい。中村委員は本日は遅れていらっしゃるとのことなので、後程伺う。２、３人以上の方にご出席いただきたいと思っている。改めて調整し、事務局からお知らせする。５月２７日と６月３日では、報告の時間はそれぞれどのくらいとれるか。

（犬塚参事官補佐）

- 両方とも時間は十分にとれる。

（２）次回の市民参加懇談会の開催について

○事務局より、資料市懇第 10-2 号について説明。

（木元座長）

- 時間をかけて議論させていただきたいのだが、前回は青森で開催させていただいたが、次回の懇談会の開催を考えたい。
- 最初に候補地について、コメントさせていただきたい。市民参加懇談会は、コアメンバーが主体になって開くという形もあるが、１回目の刈羽のように、現地の方と共催という形もある。いろいろな候補地を挙げているが、その候補地によっては形が変わってくるかなという思いもある。
- 事務局からの説明にあったが、皆様のご都合が一番よろしいのが６月２８日の土曜日である。なるべく多くご参加いただくとすると、この日がベターかと思う。それを元にして、事務局が調べたことと、現地にちょっと打診して感触はどうかなと、私なりに調べさせていただいた。
- 資料の一番最初に出ている福島県は、双葉町、富岡町、福島市と書いてあるが、前回のコアメンバー会議で、同様のペーパーをお示しした。そのときに、取材に見えたプレスの方々が、ご自分の地域に関係があるということで、例えば福島民報に、１面トップで、次の市民参加懇談会は福島かというような、記事が出ました。私どもとしては、いずれにしても、福島ではいつかやりたいと考えてはいますが、まだこのときには福島と決まったわけではなかったので、この記事をよく読ませていただくと、「日程や議題など調整」、「市民参加懇談会が本県開催、検討」と書いていただいていた。決まっているとは言っていない。候補地の一つに挙がって、福島が今問題を抱えているので、市民参加懇談会もこれだけ関心を持ってくれているというような、非常に好意的な記事になっている。それだけ私どもが評価されていると自認してもいいかなという気持ちと責任を感じている。
- しかし、打診してみて、いろいろな関わりをお持ちの方々に伺うと、今ご承知のように、東京電力の原子力発電所が安全だと確認された場合には早く動かしたいというご意向の方々もいるし、いやまだという方もいる。地元でも会合を開いたり、こ

のほかの町の方々、８町村ぐらい集まってお話をしたりと、いろいろな動きがあるし、知事との対話も展開されているはずである。その中で、市民参加懇談会が別の視点から話題を持っていくと、誤解を招いたり、あるいはあらぬ動きをしてしまうかもしれないなど若干懸念がある。そういうことを勘案すると、福島で原子力発電所再稼動の問題に一応の目処がついたときに福島県で、富岡町、双葉町という候補として出てくるのではないかと思う。したがって、私としては、次回は福島ではない方がいいのかなという気がしている。

- 新潟県は刈羽でやったので、次回は見送りたい。
- 静岡県も原子力発電所の状況からみて、これも先送りがいいかなと思う。
- 福井県は、敦賀市と福井市とあります。原産会議もついこの間、福井市と敦賀市で開催した。どちらかというと、福井市の方はこの間やったばかりだという印象が強いようだった。敦賀市の方は、「もんじゅ」の裁判のことがあったし関心は高いとは思う。敦賀市に公に打診はしていないが、敦賀市で開催できるのではないかという感触は得ている。
- 鹿児島は原子力発電所に関する話し合いでいろいろな議論もしている最中なので、先送りにしたい。
- 佐賀は、まだお諮りしていない。玄海発電所に何か問題があるんですかと、逆に聞かれそうな気もするので、佐賀もちょっと先の方がよろしいかなと思う。
- 青森はこの間開催したし、茨城は時期を考えたいという気もしている。消費地はやりましたので、先送りにすると、結局残るのは敦賀かなという気がする。「もんじゅ」の問題もあるが、それをずばりテーマとするのではなく、市民参加懇談会を敦賀でやらせていただくとすれば、青森でテーマの副題を「核燃料サイクルについて考える」としたが、その核燃料サイクルの中で一番終わりの方に出てくるのが高速増殖炉であり、「もんじゅ」であるということになれば、敦賀も核燃料サイクルのあり方を考えるにふさわしい地域であることには間違いない。そうすると、敦賀がベターかなと思うが、その辺り、いかがか。吉岡委員。

（吉岡委員）

- 消去法でそうなっているように思う。
- 鹿児島県知事は何を思ったか、先週金曜に環境調査受け入れ表明を唐突にやってしまった。６月に受け入れをすると予想されていたのが早めに行ってしまったもので、それを受け入れさせるなという市民団体の呼びかけで、私は日曜に鹿児島に行った。私の会の方が後になってしまったのだが、それでも８０人ぐらい来ていて、久しぶりに盛況だということだった。批判的なグループの集会だが、これは非常に数は集まって、関心の高さというのをうかがえたし、ＮＨＫを始めメディアがかなり、ほとんど全部来ていた。今の時期というのは知事の発言によって非常に盛り上がっているという感じは受けたが、強く推すものではない。

（木元座長）

- その場合、テーマはどうなるか。

（吉岡委員）

- 私がそのとき話したのは、環境調査と建設決定とは別物であるということである。これからの自由化の時代はほとんど切り離された形になる、環境調査は純然たる環

境調査になる、そのような時代になるであろうという、知事と同じようなことを結果として私も言ったが、そういう話題になるかなという気はする。

（木元座長）

・　そうすると「原子力発電所の増設に関しての環境調査について」というようなことをテーマとする、ということか。

（吉岡委員）

・　立地手続きということである。建設するまでの一連の手続きからなる一本道、つまり、あるハードルを越えたら次のハードルへという、一本道が想定されてきた。必ず全てのハードルを越え、最後まで突き進むんだという、そういう前提で今までの立地手続きというのが成り立っていたわけだが、これからはそうではなくて、各段階ごとに事業者も含めて慎重な判断をするようになるであろうと思われるので、そういう立地手続きの問題に対する……

（木元座長）

・　市民参加懇談会は、個別具体的な細かいことはやらない方針できた。刈羽でやったときもプルサーマルの導入の住民投票はどうだった、ということはやらなかった。住民投票をやった村で、非常にホットな問題を抱えているということは申し上げたが、その中でその村が日本のエネルギーあるいは自分たちの暮らしをどう考えるかということから入って行った。今の吉岡委員のご意見だと、市民懇をやるとすればどこから入って行くのか。

（吉岡委員）

・　入り口は飛ばして、本題だけ、すなわち環境調査で良いとは思っている。

（小川委員）

・　福井県の敦賀市、福井市というと、やはり原産会議をやったばかりという感じがする。その原産会議のときに、市民の意見を聞くという場が両市であって、市民の方々が発言している。また、電力会社の社長の方々による、信頼回復委員会というのもやって、大々的にテーブル・トーク方式の会も――原産会議とは独立していたが――同時に開かれた。皆さんが意見を言う場は、ここ２カ月の中にあったと思う。

（木元座長）

・　それは福井市でやったのか。

（小川委員）

・　福井市と敦賀市でやった。原産会議のプログラムの中に、福井も敦賀も「市民との意見交換会」のようなものがあり、意見を述べる意思のある人はそこに出ているのではないかと思う。
・　「信頼回復委員会」は、原産会議年次大会に先立ち、福井市でやっている。井上委員が前回のコアメンバー会議で話されたものである。ちょっとイベントが続くかなという感じはする。

（木元座長）

・　その懸念は私も持っていたし、妥当だとは思う。その委員会は、信頼回復に向けてというテーマだったのか。

（小川委員）

・　「信頼回復委員会」は、まさにそれがイベント全体のテーマでもあった。基本的に

は「もんじゅ」の問題ももちろん含んでいると思うが、大きな信頼回復をどうしたら良いかということで、市民の皆さんとフェイス・トゥ・フェイスで話し合いをしたいという趣旨だったと思う。

（木元座長）

・　何人ぐらいの市民の方が集まられたのか。

（井上委員）

・　８０人くらいだと思う。

（小川委員）

・　原産会議の方は　２００人はいないくらいの規模だったと思う。市民の声を聞くというようなテーマの会議では、結構たくさんの人が来た。

（木元座長）

・　電力会社の社長の方は何人参加したのか。

（井上委員）

・　１３社の参加があった。

（木元座長）

・　電力の中でも特化して、原子力発電を対象にしたのか。

（井上委員）

・　東京電力の問題から派生して企業の信頼ということだった。つまり、原子力というものを表面に出してはいなかったが、スタートは東京電力の不正記載の問題で、企業の信頼、企業の今後の決意表明等をお聞きして、それを基に１３テーブルで、というスタイルだった。

（木元座長）

・　１３テーブルというのは、１３人社長がいらっしゃるから、その社長を囲んでということか。

（井上委員）

・　そのとおりである。

（木元座長）

・　ちょっと市民懇とは形式が違う。これは公開だったか。

（井上委員）

・　非公開である。

（木元座長）

・　非公開だから参加した方の意見等も私たちに聞こえてこないということだと思う。コーディネーターはどなたか。

（小川委員）

・　秋庭氏がコーディネーター、総合司会のようにおやりになった。読売新聞の、たしか全国版に、後日の再録広告のような形で、言ってみれば皆さんにお知らせしたというような感じだったと思う。

（木元座長）

・　非公開ということだと、市民懇とは趣旨が違うと思う。非公開でやったときはよく発言が出るけれども、公開でやったときに発言をしないということに対しての批判がある。信念を持っているのであればフェアに公に言うべきではないかということ

については、このコアメンバー会議でも少し論議されたような気がする。今回、公開である市民懇を開催する意味はあるなと、私には思えてきた。

（小川委員）

・　形式は確かに全然違うが、地元の関係者から見ると、イベント続きという感じが出てしまうのだと思う。もうちょっと時期的に空けた方が良いのではないか。

（木元座長）

・　伺ったところでは、コアメンバーの皆様の都合が一番いいのは６月２８日である。原産会議はいつだったか。

（小川委員）

・　４月１５、１６、１７日。

（木元座長）

・　そうすると、これだけ空いているならという声もある。

（小川委員）

・　地元の共催でやるということで、地元に打診したわけではないのか。

（木元座長）

・　打診はしていないし、共催かどうかという話までいっていない。今日の会議で、もし仮に敦賀ならば、今日の夕方お話ししてみたい。ただ、会場もその日に空いているところはないか調べなければならない。そこで、ベターなところがあればということになる。そういうことも少し考える。

・　吉岡委員の、川内の環境調査をダイレクトに、そこから入っていくというやり方も含め、いかがか。私は、今のリサーチの段階だと、一番今やりやすいのは敦賀かなという印象は持っている。ただ、小川委員のようなご意見で、類似のイベントをやっているということがあった。ただ非公開であったということである。

（小川委員）

・　原産会議の方の市民との懇談会というか意見交換会は、公開だった。

（木元座長）

・　資料をいただいているが、市民懇の方が、もっとファミリアで、活発で、時間もとっているという自負はある。

（小川委員）

・　確かに、そのとおりである。

（碧海委員）

・　その「信頼回復委員会」の対象は女性だけか。

（井上委員）

・　女性だけだった。

（碧海委員）

・　非公開というと、何か女性の組織に呼びかけられたのか。

（井上委員）

・　多分、原産会議が福井で行われるというタイミングに合わせて、１３社の現状の中で、各企業の責任者の方がお出になられるということで、ではだれと会話をするかと、フリートークをするかということで、検討されたと思う。地元福井市で、いや、福井市だけではなくて、福井全県だと。それは立地地域であり、では消費地はどこ

かということで大阪。その両者だけでは１３電力の各トップの方たちのご意見を伺うにしては限定的だということで、各電力の地元からも各地域の女性たちが来られて、大消費地ということで東京からも来られていう形式になった。一応形は全国から集まったという形式で、福井を中心として、電力としては関西電力を中心としてという形にはなっていたと思う。

・ ちょっと今、この市民参加懇談会の開催という意味と「信頼回復委員会」との話をすり合わせてというのは余り意味がないのではないかと思う。市民参加懇談会が、これまでの流れの中で次回どこで開催するかといったときに、私は地域よりもテーマ、今何を語るのかという政策上の問題として、今どのレベルのどの問題にスポットを当てて語るのかということも片方にないと、便宜上ここで、というようになってしまう恐れがあると思う。テーマがはっきりして、そのテーマに沿って、やはりぜひこれは敦賀であると、そのテーマに沿って語るなら敦賀が最適であるということであるならば、その開催日程が近くても、間が２カ月しか空いていなくても、それはそれで構わないと思う。原産会議の夜の６時からだったか、結構遅くから市民の皆さんの公開の懇談会があったときは、後ろで聞かせてもらっていて、非常に密度の濃い、中身の濃い話が語られていて、エキセントリックではなくて非常に落ちついた、とてもいい会議をされていたので、議論を深めるという意味においては、敦賀の市民の皆さんのこれまでの蓄積は大きいと思った。

（木元座長）

・ 中身が濃いというのは、テーマや何かは決まっていたのか。

（井上委員）

・ 放射線防護の話もたくさん出てきた。専門家の先生もおられて、質問に対してはきちんと、いつでも答えができるようになっていた。

（木元座長）

・ テーマの立て方等は、そういうご質問が出るということを想定したようなものだったのか。

（小川委員）

・ シナリオはなかったと思う。市民の皆様方がこういうこと聞きたいと言って、それに対して、会場にいる関係者の方が答えたりということもあったと思う。今のご質問には会場からどなたか、知っているかたどうぞ、というような感じで。結構アットホームな雰囲気だった。

（木元座長）

・ 市民参加懇談会のそもそもとして、いろいろなお声を集約してみると、原子力政策策定のプロセスに、市民の声が届いていないではないかというのがまず、あった。私を含め、いろいろな策定会議等に参加している人にとっては、これだけ言ったという思いがあるにしても、なかなか一般の方には、そういう満足感は得ていただけない。そこで、一般市民の方が政策策定プロセスについてものを言いたい、政策策定プロセスの段階でものを言いたいというのをどうやって吸い上げるかがそもそもであった。井上委員や小川委員の、今の敦賀のお話を伺っていると、自分たちの問題意識をストレートに、放射線の影響はどうかとか、そういうものをぶつけているということなので、原子力政策策定のプロセスということよりも、もっと個別具体

的という印象を受ける。

- 青森では核燃料サイクルをテーマの副題につけ、「知りたい情報は届いますか」というテーマで市民参加懇談会を開催したが、原子力委員会としては核燃料サイクルを長期計画の中に謳っているし、別の会議として「核燃サイクルのあり方を考える検討会」というのを開いている。当面青森の問題、プルサーマルの問題、いろいろな問題を抱えていて、核燃料サイクルというのをどう考えるかというのが非常に重要な視点になってくる。
- 研究開発の位置づけだが、「もんじゅ」も核燃料サイクルの輪の一つである。だから、もし市民参加懇談会を敦賀でやるとすれば、日本はどういう選択をしたら良いのかということが根底にあって、立地地域の声が政策にどう反映するか、という観点からテーマを引き出せるかなという思いはある。吉岡委員が言われたような、入口を小さくして意見は広くということも一つの案だし、我々が今までやってきたように、入口から大きいところを考えていこうということと、方策は２つあるだろうと思う。

（高木委員）

- もう東京で２回やっているから、また東京というのもどうかという気もするが、夏前で、東京は電力不足ということをかなり深刻に皆さん言っている。本当にもう、今回は脅しではなく、と。皆さん原子力発電所が停止していることも知っているので、自分の問題としてかなり考えられる時期だとは思う。東京で原子力問題と言っても、消費地であり、今まではそう大きな問題として考えられなかったが、盛んに今「省電力しましょう」というようなＣＭも流れ出した。だから夏前で、時期としてこれから夏に向かうというときに、テーマとしても自分のものとして考えられるテーマが目の前に転がっているのが今回だと思う。だから、自分たちの身近な問題として考えられる開催地としては東京がいいかなとも思う。でも、もう２回やっているから、３回目というのもどうかなとも思う。

（木元座長）

- タイムリーではある。ただ、東京はそのテーマでのシンポジウムの数が今、多いと思う。先日もどこかでシンポジウムがあったし、テレビ番組でも地上波に限らずＣＳ放送までやっている。それで、昨日も話し合いに出て専門家のお話等を伺った。本当に大変なのは、停電の恐れがあるピークのとき、午後１時から４時の間で、７月の半ばごろから８月いっぱいだと思う。もし猛暑になって、もう無理だと危機が迫ったときに、一斉にメディアを中心に何かやると思う。

（高木委員）

- 何かとは、何のことか。

（木元座長）

- これは私の考えとして報告したのだが、例えば生放送でも何でもいい、ドラマか何かが放送されていても…

（高木委員）

- プチンと切れるとか。

（木元座長）

- そうではなく、もう後ちょっとで停電しますというときに、画面上に地震情報やニ

ュース速報のように、「今、停電の恐れがあります」と流すとか、あるいは別の番組、ニュース等を放送しているときに、画面の上や下に別のニュースが出されていることがあるが、そういう手法もあるだろうと思う。とにかく緊急情報を流す。ＮＨＫを中心として、どれだけ１業種のことに関わってくれるかという問題はある。ただ、緊急であるという場合に、これはある種の有事だからということで話ができるかという段階に今あるらしい。

・　市民参加懇談会をやるとすれば、東京で派手にやるということか。

（高木委員）

・　今とにかく、関心はあると思う。

（碧海委員）

・　私は東京というのはちょっと大き過ぎるから、例えば埼玉とか千葉とか神奈川とか、そういう首都圏という括りで考えても良いのではないかと思う。

（木元座長）

・　高木委員が言われたテーマで、市民参加懇談会を開催するということか。

（碧海委員）

・　はい。この前、新聞に出ていたが、生協が実施した調査で、家庭での電力使用のピークは午後ではないという結果が出た。要するに、普通言われている、冷房つけて高校野球見てというのではなくて、やはり家庭というのは電気を使うのは夜だ、という調査結果が新聞でも出ていたが、我々ＷＥＮ（Women's Energy Network）がやった実測の調査と同じような意味合いだが、家庭の電力消費というのは、よく言われる消費とは違う。そういう生活との結びつきで言えば、この時期に都会でやるというのは私も良いと思う。

（木元座長）

・　竹内原子力委員に伺いたいのだが、消費が高まるのは午後１時～４時と言われる、ということは、夜は問題ないのか。

（竹内原子力委員）

・　１年間は 8,760 時間だが、これに合わせて、シーズン毎に電力需要がどこまでいくかというデータがあるので、それに合わせて火力発電所なり原子力発電所の定期検査の周期を合わせてやってきている。それで極力、通常はミスマッチしないようにやってきているが、東京電力全体で、今日現在、今出ている数字では 400 万ｋW とか 450 万ｋW ぐらい足りない可能性がある。

（木元座長）

・　そのピークの、一番使うときに。

（竹内原子力委員）

・　そのとおりである。そのときはもう電力を必死に作り出している。停電が起き得る時間というのは、そう長い時間ではない。その危ないという時間は前日ぐらいには分かると思う。

（木元座長）

・　伺いたいのは、今、碧海委員からも夜の電力需要のお話が出た。昼間なら、そのときに調整してください、ちょっと節電してくださいと、こういう扇風機もやめましょうとか、テレビが無駄についている、いわゆる待機電力みたいなものはプラグを

全部抜きましょうとか。そういうことをやると、何とか供給は間に合うから節電してくださいと言っているのだと思うが、問題は、夜使っていいのかが分からない。

（竹内原子力委員）

・　夜は大丈夫です。一般的に。

（碧海委員）

・　原子力発電所が停まったままだったら、夜も問題になるのではないか。夜にも火力発電所を使うことになるだろう。

（竹内原子力委員）

・　電力の需要ピークは、午前１１時から１２時と、午後１時から４時ぐらいが高く、双子の山のようになっている。

（碧海委員）

・　それは承知しているが、１時から４時は家庭のピークではない。

（木元座長）

・　企業のピークだろう。

（碧海委員）

・　オフィス等はもちろん使っているだろうが、家庭は午後の１時から４時は使っていないというのが、この前新聞に出ていた。第一、その時間家庭にいない人が多い。

（木元座長）

・　今何を申し上げようか迷っているんだけれども、要は電力というのは貯められないから、ピークのときは節電してくださいと、企業に対しても家庭に対しても、皆さんにお願いしていますよね。

（竹内原子力委員）

・　緊急時に東京電力から電気を制限するという特約契約を結んでいる事業家もたくさんある。それは発動する場合もある。その条件で、電気料金を安くしているところがある。

（木元座長）

・　そういうお願いをしながら、なおかつそれ以外の皆さんに今お願いしようとしている。それをシンポジウムでやる場合に、どういう方たちを対象にして、どういうようなことができるか、イメージが難しい。

・　停電自体は、東京でも比較的最近ある。

（竹内原子力委員）

・　１回ある。

（木元座長）

・　１９８０年代に、１回。東京は７分停まったのだったと思う。

（碧海委員）

・　テーマとしてはすごく大きなテーマがあると思う。電力の需要と供給というのは、一体どういう関係にあるのか、なぜ足りなくなるのかということが、一般の人たちが、必ずしも分かっているわけではないと思う。

（竹内原子力委員）

・　高木委員が言われるように、この時期にやるというのは、一般の方々を含めて、関心は高いと思う。

（碧海委員）

・　一番良く分かってもらえるときだと思う。説明しやすいときでもあると思う。

（井上委員）

・　先日、福井の人たちともお話をしたときに、東京電力のこの今回の問題と、それから節電の動きというものは、何とかいろいろ努力した結果、まあまあ大丈夫でしたと言ってもらうのは非常に困るという話があった。つまり、原子力発電所は立ち上げも何もしなくて、ピークも何となくクリアできた、何とか努力をいっぱいされた結果、この危機は脱したとなると、それはすごいことかもしれないけれども、福井のような立地地域では、それは大きな問題であるとのことだった。すなわち、自分たちのところにある原子力発電も、なくてもいいと言われているようなものなのだということである。とても危機感を持ってお話をされた。だから、実態より、たとえそれが少しオーバーでも、節電とか生活の工夫とかシステムの変更とか、やれることはすべてやっていこうとか、やっているのだということを、東京エリアの問題ではなくて、全国の立地地域の問題として取り組んでほしいという意見がたくさん出た。だから、今回ちょうど６月の末で、それこそピークであり、これは東京にということよりも、関東エリアにその問題がまさしく発生したということなので、都内よりも、碧海委員の言われたような少し生活圏のところ、神奈川とか埼玉とかに少しシフトして、その生活レベルで分かっていただくことは、東京だけの問題ではないということになるし、福井にとって見えてきて欲しいという要望はものすごく強かった。

（木元座長）

・　昨日ある会議に出て感触を得たのは、高木委員が言われたことはそのとおりで、その問題に対してあらゆる手段を講ずるらしい。６月２８日頃は類似の催しがたくさんあるのではないかという懸念が一つある。

・　もう一つは、最初に申し上げたように、市民参加懇談会が政策策定のプロセスに自分たちの意見をどう反映するかといったときに、東電の電力の需要と供給のバランスの問題とか、それから東電のこういうような緊急事態が発生したのはなぜかという説明をすることは、大事なことなんだけれども、問題を特化し過ぎているというイメージはなきにしもあらずだと思う。それをどう工夫して出すかということにならざるを得ないと思う。

（吉岡委員）

・　電力の需給をどう一致させるか、常時一致させるかというのは、とても面白い問題であって、この知的な面白さというのを理解していただいて、他では出ないような提案というのが出されることが期待できる。私は皮肉屋だからこんなことを言うのだが、他では出ない提案というと、０基か１７基か、あるいは１基か１７基か、ではなくて５基まで動かさせてください、あとは夏だから休戦しましょうといったものがありうる。昔の戦（いくさ）の農繁期は休戦になったように、そのような解決策もあるし、いろいろな解決策があり得ると思う。オフィスの需要をどのくらい下げるか、あるいは家庭はどのぐらい下げる余地があるかとか、予備力をどのように評価するかも含めて、非常に面白い問題が山積していると思う。

（木元座長）

・　それは碧海委員が言われたように、需要と供給という観点からということだと思うが、私は大賛成の部分が一つある。それは、今まで電力等を送る場合に、供給側に供給義務とか供給責任があるとか、そういう言い方を国も電力もしておられる。私たちは需要者側として、「供給義務をあなたたちは負っているでしょう」、「停電させちゃ困るでしょう」という、何かいつも「お客様・受け身」という観点からしか物を言っていなかった。私が今、資源エネルギー庁の基本計画部会で――吉岡委員と一緒だが――そこで言っていることがある。今までエネルギー基本法にしても、国は供給の責務があります、事業者も責務を負っていますと言っている。では需要者側、一般消費者に対してはどういうことを言っているかというと、供給をするからあなたたちも努力してくださいという、需要者側の努力という言葉しかない。私は、需要と供給のあり方を考えたときに、「努力」ではもう弱いだろうと思う。需要者側の方も、これだけ私たちは豊かな暮らしを安定させたいから、これだけは供給して欲しいという要望がある。そのことに対して、自分も責務を負っているだろうと考えている。要求する、欲しい、だから停電になると困るということではなくて、これだけ要求する代わりに、私たちも責任を負うから、例えば火力発電を増やしてくださいと言うかもしれない、原子力発電を増やしてくださいと言うかもしれない。そうなってくると、非常に大きい視野で、エネルギーの供給者側のあり方と、需要者側のあり方が見つめられるだろうと思う。その意味での需要・供給ならば、とてもいいテーマになると思う。

（碧海委員）

・　そこが一番大きい問題である。例えば、深夜電力について、電力会社が散々売ってきていながら、なぜ深夜電力を薦めるのかという、一番肝心なところの説明が実に不足している。私が電力会社の仕事をした中でも常に感じ続けたことは、やはり需要と供給。電力の需給の根本的ないろいろな問題というのを、どうしてもっと一般の人たちに、もっときっちり説明しないんだということである。だから、もしそういうことをテーマに懇談会をやるならば、例えば第１部の方では当然のこととして一般の人たちに知ってほしいような情報をある程度出しておいて、第２部でそういうことを根本に置いた上で、発電所のいろいろな問題がどうなのかとか、日本にとって原子力発電所は本当に必要なのかとか、そういうことをもう少し考えてもらって意見を言ってもらうということはできると思う。

（木元座長）

・　こちらから、電力の仕組みとか発電の仕組み、どうやって供給されてくるか、電気は貯められない、夜は電気が余っている、そういうことを説明するとなると、勉強会のような部分があることになる。

（碧海委員）

・　私は電力の需給の問題というのは、専門家が非専門家に向かって、単に知識として説明するというようなことではないと思う。一人一人の市民が知っていなければいけないことである。生活者として知っていなければいけないことである。だから、これは一方的に専門家の話をただ聞くということではなくて、我々の生活は、実はそうだったのかと、電気というのはそうだったのかということを一度考えてもらうということである。それはお勉強するとか、専門知識を単に身につけるということ

ではなく、そういうことがわかっているのは当たり前のことではないかと思う。

（木元座長）

・　それを市民懇でやる意味をこれから諮らなくてはならない。

（竹内原子力委員）

・　私も電力会社で長く仕事をしていた。夜の電気はとても余っている。それで、深夜電力を使って欲しいと、深夜電力の特約で各社頼んで温水機つけていただいたりした。ご理解いただいていないということだったが、碧海委員のように、非常によくご存じの方は、そうたくさんはまだいないのかもしれない。ただ、これは市民懇で取り上げるということについては、電力の需給のあり方と言うようなテーマは、少し大き過ぎるのではないかと思う。特に原子力委員会の立場から言うと、原子力委員会という枠があること、エネルギーの需給の問題、特に今、電力自由化の議論を始めており、そういう軸を全くフリーにした議論をすると、参加している人はいろいろなおもしろい知識もあるし発言もできると思うが、結果としてだから何だということ、要するに発散してしまうのではないかという気がする。非常に時宜を得てはいると思うが。

（碧海委員）

・　でも、現実に原子力発電が東京電力では全体の４０％と聞いている。結局は、原子力が何で４０％要るのかということである。私は原子力の問題にも結びつけられると思う。

（竹内原子力委員）

・　結びついているとは思う。

（木元座長）

・　市民懇でやるとして考えてみると、東京電力は今原子力発電があと１０基ないと供給が足りないと言っている。なぜ原子力なのかということから入っていけば、需給の問題は当然出てくる。そして、さっきおっしゃったような知識的なこと、基礎的な知識を持ちたいという意見も出てくるかもしれない。しかし、それは竹内原子力委員がおっしゃったように、原子力委員会の市民参加懇談会でやるとすれば、どういうことが考えられるかと、私の立場から今、悩んでいる。

（竹内原子力委員）

・　私も悩み始めている。テーマをよほど絞り込まないといけないのではないか。

（高木委員）

・　１０基必要だからといって、それをいきなり言ったら、反発されるだけではないか。いくらその時期だとは言っても、そういう話から入っていって、必要だねなどという話にはならないだろう。

（木元座長）

・　１０基必要だと、電力がそう言っているので、我々としては、なぜ１０基必要なのかということからやらなければいけないと思う。

（竹内原子力委員）

・　こういう需給のミスマッチが出たこと自身は東京電力の問題だが、そこだけ議論すると市民懇の話としては相応しくなくなると思う。

（木元座長）

・　要は原子力発電所の不正記載から端を発している。その結果１７機が停まることにになったのだが、今、東京電力が言っているのは１０基起動しないと山は乗り切れないと。
・　今日たまたまお昼の生放送のテレビ番組を見ていたときに、大変理解のある言葉を聞いた。例の「節電隊」の紹介から始まったが、原子力発電を動かすとか動かさないという問題よりも、日本には電気が余っている電力会社もあり、それを融通したら良いではないかということになった。ところが東西で異なる５０ヘルツ、６０ヘルツの問題で、西の方で余っていても９０万 kW しか東京電力は融通してもらえないという話になったときに、なぜこうなっているんだというところへ話が及んだ。融通できる量ををもっと増やすようなところにお金を使えば良いと発言した方は、火力発電所を動かすことでＣＯ$_2$が出るということを少し警告していた。ならば、余っている電力を何とか持ってくるような技術的な工夫をすれば良いではないかということに終始していた。そこで、融通の問題で、なぜ東日本が５０ヘルツで西日本が６０ヘルツかという話にも及んだ。

（中村委員）

・　その違いは明治時代まで溯らなければ分からないと思う。

（木元座長）

・　確かにそこまで行くだろう。国内で違う周波数になっているのは、日本ぐらいだという話も聞いている。ＥＵ（欧州連合）等では一律送電線で北欧まで電気を送れる時代に、日本だけがこんな狭い島国で５０ヘルツか６０ヘルツかで問題になっているということにも話が及ぶ。お金を使うならば、周波数を変換して融通できる電力を増やした方が良い、とか。

（竹内原子力委員）

・　それぞれの電力会社がその地域でバランスをとってやってきたが、緊急融通というのはもちろんある。緊急融通というのは、緊急時の借り貸し勘定みたいなもの。

（木元座長）

・　それも９０万 kW の枠の中であり、今回はもうそういう話を超えてしまっている。そうなると次の問題が派生して、なぜ東京電力の原子力発電所がＢＷＲ（沸騰水型原子炉）で関西電力がＰＷＲ（加圧水型原子炉）か、ＧＥ（ゼネラル・エレクトリック）社とウエスティングハウス社の違いか、とかいろいろ疑問が湧いてくる。

（碧海委員）

・　そういう方向の話題でも、テーマとしては「本当に大事な情報は届いているか」、でも良いと思う。例えば、東京電力が全国の電力の３分の１だということにしても、皆さんご存知かというと、そんなことはないと思う。今言われた電力の融通の限界ということも理解されていないと思う。こういったことは、専門の知識ではない。一般の人にも良く分かる情報だと思う。でも、その情報がきっちり届いてないということである。

（木元座長）

・　この間お話したときに、届いていない情報ももちろんたくさんあるが、これだけメディア等が情報発信しているのに聞いていないということは問題にならないのかということを言われたことがある。私としては、そういうことを知ることも、先ほど

言った国民の責務というか、自分の責任範疇に入るのではないかと思う。

（高木委員）

・　私は先週、パリにユネスコの会議で行っていたが、そのときに交通全面ストがあった。最近日本ではそういうことがなかったので、少し驚いたのだが、もっと驚いたのは、会議等が中止になったりせず、普通にあることだった。ユネスコの会議は交通全面ストだからといって全然関係なく、きちんと開催される。交通手段は自己責任という感じで、会議場の近くにホテルを取るなどして、歩ける範囲で来れば良いではないかとか、皆さんそういう対処の仕方で来て欲しいということだった。

・　そのストは、日本と違って労働者側の要求が定年を下げろとか、定年をそのままにして上げるなという要求だった。フランスの人たちは、労働者としてそういう要求があるんじゃないのという感じで、ストという権利を受け入れて、その日をどうやり過ごすかということを各自自己責任という感じでやっていっている。最近日本ではストがなくて、久しぶりにそんな全面ストに遭って、これは日本で起きたら大変だと思った。皆さんパニックになってしまうのではないかと。私はその次の日、飛行機に乗れないのではないか、パリから出られないのではないかと心配だったが、それもみんな自己責任で、誰がどう車を手配するとか、その中に何人乗せていってもらうとか話をして、一方で飛行機はお構いなく淡々と時間通り出発していた。頻繁にあるからということもあるだろうが、何かそういうことが起きたときに、各自はどう対処するかということをフランス人たちは普通に考えている。今の日本人は、そんなことが起きたら、なぜだ、困るじゃないかというだけになっており、フランス人のそういう考えは、日本人には失われている部分だと思った。

（木元座長）

・　今の日本では、交通も動かさなければならない義務があり、電力も供給しなければならない義務があると、だから止まる筈はないと利用する側が思っている。

（竹内原子力委員）

・　高木委員が言われるとおりである。海外ではストライキもあるし、停電もある。停電はパリ、ニューヨーク、ロサンゼルス等と比べても、日本では１０分の１か１５分の１の頻度でしかない。

（木元座長）

・　日本の平均停電時間は１年間で１軒当たり９分と聞いている。

（竹内原子力委員）

・　９分という短さの国は世界でも珍しい。

（木元座長）

・　アメリカは７３分、イギリスは６３分だったと思う。

（竹内原子力委員）

・　そのため、停電と言っても、まだ皆さん怖さがピンと来てないのではないかと思う。私の若いころは停電も割とあったが、恐らく今の世代はそういうことを皆さんご存じないのではないかと思う。現実に停電が日本ではほとんどないから。

（中村委員）

・　身にしみて感じたのは関西の人だけだと思う。阪神淡路大震災のときに。

（竹内原子力委員）

・　今はもうないと思う。
（碧海委員）
・　地方圏ではまだある。
（木元座長）
・　東京電力管内であれば１９８０年代に、四百何世帯の停電があったと思う。
（竹内原子力委員）
・　もうちょっと大規模だった。１０年ぐらい前か。東京の停電は７分ぐらいだった。
（高木委員）
・　原子力発電所というものがあって、それが停まったときに、停電等も起こり得て、そういうときは自分たちでどう対処するというような、国民それぞれの責任という部分まで、日本人は全部要求し過ぎるような気もする。だから、パリではこれが日本で起きたら大変だと思った。淡々とやり過ごしているフランス人たちを見て、日本人は最近少しおかしいのではないかという気がした。
（木元座長）
・　話を戻すが、あえて市民参加懇談会でやった方が良いのかどうなのか、そこをご討議いただきたい。
（中村委員）
・　もちろん大変興味深い、大事なテーマだとは思う。しかし、この市民参加懇談会の役割をとりまとめで皆さん確認されたと思うが、そういうテーマでやったとして我々が何を広聴するのかが見えない。それを千葉、東京、埼玉あたりで開催した場合、従来の第１部、第２部という構成でやるとして、第１部は今のようなお話を出すこともできるし、いろいろなことが考えられるが、第２部で我々がそこから原子力政策を中心とした日本のエネルギー政策に持って帰るものとして、何を引き出せるだろうかというのが見えないように思う。
（高木委員）
・　原子力発電所を多く停めたらどういうことが起きるかというところから、原子力発電をやめるという選択をしたら、その後に起こることにそれぞれ責任を負わなければいけないのではないかという、そういう視点があっても良いのではないか。
（中村委員）
・　市民から何を聞くかが分からない。
（高木委員）
・　そういう覚悟を聞くということである。
（碧海委員）
・　電力会社は電気を供給しなければならない義務がある。供給規定、お客との契約である。だから、一方的に契約を守らないわけにはいかないだろう。今度の場合、電力会社の立場ではものは言えないと思う。要するに、その需給の問題をテーマにするということは、一般の立場で、原子力発電所の必要性として、東京電力の電気の原子力の割合が４０％なのはなぜなのかというところを、もっと消費者側が考えなければいけないのではないかということだと思う。
（中村委員）
・　それを訴えることはできるが、それについて市民から何を聞くのか。

（碧海委員）
・　市民の皆様が、どういうふうに考えているかを聞く。
（中村委員）
・　ほとんどの人は何も考えていないのではないかと思う。
（碧海委員）
・　それはなぜ何も考えてないのかというと、十分に知らされてないからだと思う。市民の方が知らないのがいけないという意見もあったが、私は自分の電力会社での経験から言えば、知らせ方の努力が足りないということだけははっきり言える。例えば深夜電力の件にしても、方向がずれているという気がする。
（木元座長）
・　そうすると、原子力委員会に報告する場合に、情報の問題として原子力に限らず電力にかかわる情報の出し方に問題があるから、それを政策に反映させるようなご発言があったと、報告することになるということか。
（碧海委員）
・　一番大元に戻るが、原子力の問題がなぜこんなに問題になるかと言えば、エネルギー問題がよく分かってないからだと思う。エネルギー問題が最も身近なところで触れられるのは、電気に限らなくて、ガスでも石油でも何でも良いが、今回は原子力発電所ということから考えると電気だと思う。その大元のところが理解されてないからこそ、原子力の問題が起きるのだと思う。これは以前から再三主張していることで、エネルギー問題、特に生活にかかわるエネルギー問題がきちんと常識として理解されていないからである。
（木元座長）
・　刈羽で市民参加懇談会を開催したときも、自分たちがどういう生き方をしたか、日本の経済成長をどうしたらいいかということが絡んでくるわけだから、その場合のエネルギー供給は、ガソリン、石油含めて、どうやったらいいかということが論じられれば原子力が見えてきて、原子力に特化して話すこともできるだろうと考えて大きいテーマにした。しかし、入り口となるテーマとしては、そこの地域で一番受け入れられやすい形のものにすべきだったという反省があった。その方が関心を持っていただけて、ご発言もいただけたという過去の例があるから、昨年の１１月に東京で開催したときも東京電力の不正記載をテーマに取り入れた。
・　一方、次の開催を皆様のご都合から６月２８日とすると、私のリサーチしたところでは、今のこの停電問題についてはいろいろなイベントがあり過ぎて、しかも東京ではすでに２回、市民懇を開催しているという思いがあり、東京近郊で停電問題を扱うというのは、私の頭の中にはなかったというのは事実である。敦賀がベターだと思っていたので、どうしたらいいかと今、迷いに迷っている。高木委員からのご発言からも、これはぜひどこかでやらなければならないと思うし、碧海委員のようなとらえ方でお話ししていくのも役割の一つにはあるだろうと思う。これをどういう形で収れんしていくことが可能かと、何かアイデアはあるか。
（中村委員）
・　市民参加懇談会で、というのが難しいところである。例えば電気新聞社主催等というなら、大いにそのテーマでやるのは良いことだと思う。タイムリーでもあるし、

問題意識を持ってもらうのも非常に重要なことなので、我々の考えている市民参加懇談会としてそういうものがあっても良いのかもしれない。ただ、どういう糧を得て帰ってこれるかということを考えたときに、本当にどういう声、意見が聞かれるか、聞くことができるかというのが見えないと思う。本筋のものをピックアップできるのかというのが分からない感じがする。

（吉岡委員）

・　私も福井県、首都圏、どちらもあり得ると思うが、福井県の場合、私が気になっているのは先日の県知事選挙のことである。西川氏が約２４万５千票とって、脱原発を言っている高木氏が約２０万票でかなり接近していたが、福井市では高木氏の方が多くとっている。敦賀等の立地地域では、ダブルスコア以上で西川氏が勝っている。こうしたことを考えると、生産県においても、かなり住民の意識変化というものが感じ取れた。これは高木氏が勝った場合のコメントとして用意した話で、使わず終いだったが、福井県で開催するならそういうところを掴みたいと思うので、敦賀市ではなくて福井市の方が良いと思う。

・　首都圏で開催する場合には、独自性を持たせる方策としては、注文を受ける会であるということを徹底するならば、情報の出し方、こういう情報の出し方は変ではないのかとか、主に資源エネルギー庁や電力会社に矛先が向くことになるかもしれないが、情報の出し方として、非公開、公開だけではなくて、うまい形で加工するという、加工する際のバイアスのかかり方とか、そういうところの批判が出れば、それは提言としてつながり得るのではないだろうかと思う。

（木元座長）

・　それは、原子力の情報の出し方で問題があったということでまとめていただいて、それを原子力委員会に報告するのかということになる。昨年の１１月の東京で開催した市民懇でも情報のあり方ということで、パネリストの清水鳩子氏が、東京電力の不正記載の情報は、一般契約者には個別に全く届いてないと発言されて、それは既にダイレクトに電力にも国にも言った。だから、また同様のことで終始するのはよろしくないので、それ以上のものでやるならば非常に根源的なことしかないと思う。例えば電力でも何でも、需要者としてどう考えていくかということ。それを今度原子力委員会に持って帰って報告する場合に、ここの市民参加懇談会の設立趣旨等と照らし合わせてみると、どういう形のご報告ができるかなと悩んでしまう。例えば、原子力委員会の政策策定のプロセスに反映することとは違った視点になってしまうという懸念もある。それは報告先が違うだろうということになるかもしれない。

（中村委員）

・　そこがポイントである。

（碧海委員）

・　私は、敦賀で開催して核燃料サイクルというテーマというのがどうもピンと来ない。私がもし敦賀の市民だったら、何か出る気がしないなという気がする。

（木元座長）

・　どういう点でそう思われるのか。

（碧海委員）

・　余り何か言う気がしないなという気がしてしまう。敦賀だったら、例えば地域振興等というテーマが良いのではないか。敦賀市は、原子力発電所の立地があったことですごく変わったのだと思う。そういうことが関わっていれば、出る気になるという気はする。

（木元座長）

・　テーマとして、なぜ核燃料サイクルと言ったかというと、「もんじゅ」の判決があったこと、まさにご当地であること、その中で今まで立地振興とか原子力と共生していると言っていた方たちの中に、また別な視点が出てきているのかということも探りたいという思いもあったからである。共生されている中で、研究開発の「もんじゅ」も認めますよと、これは早く再稼働してくださいとおっしゃっていただく中に、だけれどもと条件があるというならばそれはぜひ聞きたい。その条件はまさに原子力委員会の策定プロセスにはずばり反映できることである。敦賀で開催してそういう声が聞けたらという思いがある。条件的に今調べたところでも、敦賀が一番よろしいのではないだろうか。停電のことも考えると、東京以外の消費地でというのも一つの案だとは思ったが。

（小川委員）

・　島根とか静岡、愛知、広島、香川、兵庫については、これはまだ検討はしてないと考えてよろしいか。資料１０－２の２枚目、表の右側の箱に入っている中堅消費都市は、この名前が出てきたとき、ユニークなご意見だと思ったのだが、こちらはまだ打診はされていないということか。

（木元座長）

・　打診していない。特に問題がない場所の場合などは、我々がテーマをかなり真剣に考えていかないと、何をやるんですかということになる。

・　私としては発電所の立地地域という形で考えてみたが、もちろん今のようにご提案いただいた方が良い。

（中村委員）

・　意見というわけではないが、小川委員が言われた、中堅消費都市を提案したのは私である。従来ご提案のあった例えば大消費地東京、首都圏というのをあえて首都圏でやらないで中堅消費都市で開催するというのが私のイメージだった。ひょっとすると東京は夏、大停電になるかもしれないと大騒ぎしているんだけれども、皆さんどうですかとそういう都市で伺って、そんなの考えられないよ、というような声から始まると思うが、そういう方が効果があるかなと思った。

（小川委員）

・　あなたの町に原子力発電所が来たら、というテーマも考えられる。

（中村委員）

・　もちろんそういうふうにも広がると思う。

（小川委員）

・　あるいは放射性廃棄物の処分施設が来たらどうですか、どう思いますかというような、そういう問いかけで中堅都市の声を聞くという感じだと思ったので、大変おもしろい視点だと思っている。

（中村委員）

・　題材はたくさんあると思う。立地そのものではないけれども、大体の都市が隣接しているとか、何十キロ圏内には発電所があるというケースなので、テーマはいろいろなものが入れられると思うし、これぐらいの規模の都市では、資源エネルギー庁等他省庁のイベントにしても余り開催される機会がないのではないかと思った。

（小川委員）

・　市民参加懇談会としては、全国を視野に考えるという、そういうスタンスは必要だと思う。少しずついろいろなところで、できることを続けていくというか、やっていかなければいけないと思っている。

（碧海委員）

・　もし敦賀市でやるとして、井上委員のご意見を少し伺いたいと思う。市民参加懇談会というのは一般市民が出たいと思うようなものにしなければならない。結局関係者だけが来てしまうようでは余り意味がないと思う。そこのところを井上委員にぜひご意見を伺いたい。

（井上委員）

・　先日の原産会議の夜の市民フリートークに参加したときに、大方出た意見が防災関係で、とても熱心に非常に細かい日常の対策はどうなのかとか、もしこういうことはどうなのかと実に熱心にお話をされて、随分その時間をたくさんとっておられた。でも先ほどのお話で、次に向けての政策的なものを原子力委員会に上げていくためにご意見を聞きたいということであるならば、本当の一市民にとってはまだ遠い課題で、直接自分でそこまで出かけていって意見を言うということにはならなくて、やはり関係者、内堀が集まって話をするだろうという気はする。

・　特に県知事が決まった直後でもあり、少しまだ地元は落ち着いてないだろうという気がする。もう少し先でもいつでも語られるテーマだろうと思うので、今社会が動いている中で最もタイムリーで、誰もがまあまあ知っているというのがこの東電の節電の問題で、コマーシャルベースぐらいのことは誰でも分かる。そのことを原子力委員会で一つのテーマとして取り上げるときに、対象者というのは私から言うと、内堀とか中堀の人が集まってさらに意識を高めるとか、そこから何か政策的提案を受けるというよりも、もしかしたらこれ１回になるかもしれないが、外堀のさらに外にいる人たち、その人たちの意見を聞くチャンスというのはこれまでそうなかったのではないかという気がする。

・　何が停まるかというと、原子力発電所が停まるから節電なり停電なりという問題が起きてくる、そこの結びつきが自己責任と言われても、そうだったのというぐらいの人が多いのではないかと思う。つまり、業界の方とかよく勉強する方とかという内堀か中堀か、そのあたりの人たちがいつもこういう問題に集まってくる。この東電の停電、節電に関してだけはこれはもう一つ外側のふだん何の意識もしない人たちの意見を聞くという意味においては絶好のチャンスではないかと思う。

（木元座長）

・　そういう方たちにたくさんご参加いただけると思うか。

（井上委員）

・　テーマ作りが大事だと思うが、原子力発電が停まったということからスタートして、それについてのご意見、外堀のさらに外にいる人たちの意見を聞いてみたら、

これは１回だけでも時期的にはとてもタイムリーだと思う。

（木元座長）

・　外堀の方たちは、今までは非常に無関心な層だと思う。それをどうやって参加していただくかが一つと、それからもし外堀の方たちが停電に関してご意見を出してくれるとすれば、原子力に関してはどういう意見が出ると思うか。私が自分で動いて、いろいろなところで聞くと、残念だけれど意見が出ない。本当に一生懸命誘導しているつもりでも、「私たちは知らない」「電気は来るわけだから」「火力といっても火力は炊いてはいけないんでしょう」とか、「何で火力やらないの」という人もいらっしゃって、そういう質問等へのお答えになってしまう。そこがもどかしい場合がある。

（井上委員）

・　それが社会の実態のような気がする。知らないで暮らせる日本の社会の実態。

（木元座長）

・　だから、私は自己責任だと。需要者側が供給のあり方、供給の形にもっと関心を持ってほしいと思うから、資源エネルギー庁の基本計画部会の方でもそれは言っている。できればエネルギー基本計画の中に、国民の責務という言葉を使いたいと思っている。

（井上委員）

・　私たちは意見の出るところに行って意見を吸い上げてくることも大事ですし、政策に直結できるようなものを聞いてくるのも大事だが、全く意見も出ない人たちを相手に聞いてくる耳を持つことも、とても辛いことだが、必要ではないか。

（木元座長）

・　必要だと思う。聞いて、耳を持っていって例えばどういうことが意見として出てくるか。

（井上委員）

・　全く出てこないかもしれない。

（木元座長）

・　そこがポイントである。私はそういう場合、規模的には小規模の集まりしかないと思っている。非公開になると出てくるという人がいるかもしれない。

（碧海委員）

・　私はそうは思わない。省エネルギーをテーマにしたり、エネルギー問題をテーマにしてあちこちで講演をして、そういうのを聞きに来る――女性がほとんどですけれども――その人たちは決して無関心ではない。要するに、こっちが何を話すかだと思う。それによって、例えば省エネルギーと節電の違いが問題になる。

（木元座長）

・　私は省エネルギー関係の活動もしてきたが、それに関心を持つ人は外堀ではなく、私はずっと省エネをやってますという人が来る。それで、そういうような問題も言ってくれる。そういった中で、無関心というような人をどう集めるのか。

（碧海委員）

・　だから、それはテーマ次第ではないか。６月２８日の前に停電でも起きたら、それは大変なことになると思う。

（中村委員）

- 微妙に難しいのは、外か内か分からないけれども、グレーゾーンの人でも、例えば講演会とかシンポジウムの場合、出演者の顔ぶれを見たり、テーマによっては足を運んでくれるというのは確かにある。それは学生たちだってそういうケースはある。だけれども、それはパッシブ（受動的）なわけである。何か受け取りに来る。市民参加懇談会は開催すると、逆にこっちからいただいてこなきゃいけないというところである。そうすると、例えば第１部、第２部で、第１部の顔ぶれがこんな人の話なら聞いてみたいということで来てくれて、そこから無理やり第２部までいてもらって、第２部に引き出すという手は作戦としてはあるかもしれないが、第２部になった途端に別に言うことありませんといってぞろぞろいなくなるということも考えられる。それはそれでまた実態ではあるが、それだと我々は何の成果も得られないのかと、やっぱりそうかで終わっちゃうのかと、そこはちょっと残念である。
- 井上委員が言われるのは非常に良く分かるのだが、そこのところでふだん何も関心持ってなかったのよという声だけでもいいから聞きたいということだろう。それをどうやっていくかというのは、呼びかけるようなテーマ設定と２部構成でいくなら第１部のパネルディスカッションのところに少し魅力的な出演者を考えるとかということになると思う。

（木元座長）

- 私がまた申し上げて恐縮だけれども、私が市民参加懇談会を原子力委員会に設立させていただいて、原子力が今こういう問題を抱えてアゲンストの風（向かい風）の方が強いという中で、そのアゲンストの風の意味も知りたい。だから、吉岡委員にも入っていただいて、いろいろなご発言をいただいているわけだが、そのアゲンストの風の中で、私なりに風を受けとめ、原子力の存在する必然性の流れも感じている。それをどうやって理解していただくかといった場合に、自分がまずこの方たちはどういう考えを持っているんだろうということをお聞きすることだと思う。話が前後するけれども、先ほど責務と言ったのは、例えばなぜ刈羽でやったのかというと、住民投票をやったなら、それは投票の責任があるだろうと思った。そして、投票した結果も自分たちがまた責任を負わなければいけないだろうと思う。そのときに、その結果を私たちも受けとめるが、国のエネルギーの供給に関して、どういうような視点を持っていらっしゃるのかということも伺わなければならないと思う。だから、ホットなイシュー（issue）を持っているところで開催した方が良いだろうというのが最初の提案で、刈羽から入っていくということになった。
- その後も東京、青森で開催したが、東電の問題とか、それから六ヶ所村の問題とか、漏水の問題とかいろいろあった。核燃料サイクルはなぜあるのかという疑問が、プルサーマルの反対があったときにもかなり出てきた。その場合も私たちはなぜプルサーマルを否定なさるかということを聞かなければいけない。福島県知事のところに原子力委員会も行ったが、福島県で問題が起きたときに、福島県で開催するのだろうという話も出た。今回敦賀でやるときには、さっき一番最初に申し上げたように、「もんじゅ」裁判の判決が出た。そうすると、今まで関心を持っていなかった方が福井全体としてより、敦賀として見た場合に、自分たちはどうして原子力を認めているんだろうと、先ほど碧海委員が言われたように、地域振興の問題とか、

それから原子力と共生することの意味とか、そういうものをしっかり考えていらしただろうと思う。あえてああいう結果が出ても、それを受け入れようとしているとすればそれはなぜなのか、そして受け入れるからには条件があるということがあるかもしれない。そういうことをもし引き出せれば、これは原子力行政への反映というか、市民の考えをそこに投げかけることができるだろうという思いがある。あえて問題を抱えているところという意味で敦賀が最適ではないかと思った。一方、高木委員からのご意見で、問題を抱えているという意味では東電、東京都エリア、関東エリアが適地であるのは事実である。しかし、それをやる場合、説明ではなくて、意見を引き出すとすれば何が出てくるだろうという疑問もある。そうすると、先ほど申し上げた需要と供給の中で、需要者側の責務というのを問う以外ないという気はしており、難しいと思う。

（碧海委員）

・　例えば、「もんじゅ」の裁判の問題などというのはまさに専門的な問題で、一般の人は専門的な人たちが関わることで、自分たちには直接余り関係がなく、最後の最後どうなるかということだけが分かれば良いということだと思う。だから、私は敦賀でやるのはいいが、敦賀で一体何をやるのかというところが私にはどうしてもピンと来ない。

（木元座長）

・　先ほど碧海委員が言われたことだろうと私は実は思っている。敦賀市は原子力と共生している地域である。

（碧海委員）

・　それは部分的にということだと思う。

（木元座長）

・　原子力との共生については一般市民が大いに賛成しているのか。その賛成している理由は何なのか、実は批判的な意見を内在しての共生かもしれない。そういうものがあったときに、それを吸い上げていって反映させるということはできるだろうと思うし、私たちの知らない部分も出てくるのではないか。

（碧海委員）

・　地元の心情として、何かちょっと気になるところがある。

（木元座長）

・　そこは配慮したい。とにかく６月２８日が、一番メンバーの参加が多い。

（吉岡委員）

・　直接には関わらないかもしれないが、基本計画部会でも私は木元座長とご一緒しているが、自治体や事業者の責務というのがエネルギー政策基本法に書かれていて、これは私は精神条項だと思っているので、とりあえずその論点は了解しておいて良いと思う。

（木元座長）

・　それは供給側の責務であって、国民側は努力、国、事業者側の方は責務になっていると思う。

（吉岡委員）

・　国民の努力とまでは法律には書いてなかったのではないかと思うが、それはともか

くとして、責務があるのは権限あっての責務だと思う。権限がないのに責務だけ負うというのは、こんなの知らないよということになる。当然空洞化して、責務に違反したら何か罰則を与えられるとか、そういうことにはならないだろうから――精神条項だというのは、そういう理由なのだが――責務といった場合には権限とセットでとりあえずは考えなければならないと思う。自治体の場合には、現に住民投票で権限は行使して、法的権限はないが、事実上の権限はあるということで行使しているし、今度の東電事件の場合に関しても、自治体がイエスと言わないから原子力発電所を動かせないという面があるので、事実上の権限はそれなりに行使をしている。一方で、都市の住民は何の権限があるのかということは私には非常に気になる。責務があるならそれに対応する権限は一体何だろうという気がしている。今までの議論を聞いて、都会でやるのは難しいかなと思う。何を聞くの、ということになると思う。

（木元座長）

・　もし何かに依拠するとすれば、憲法第２５条の「健康で文化的な生活を営む権利を有する」というのがある。豊かな生活という意味でエネルギーの安定供給というのがあるかもしれない。そういう要求をする権限があると。

（吉岡委員）

・　基本的人権ということ。

（木元座長）

・　具体的には２５条の精神だと思う。それしかないような気がする。

・　これだけ需要が高まって、あれほどCO_2は１９９０年レベルからマイナス６％と言っていながら伸びている。これは何なのかと思う。

（吉岡委員）

・　必要十分な政策手段を講じないからだと私は思う。その辺はまた別の場で議論したい。

（木元座長）

・　またやらなければいけないだろう。

・　何か良いアイデアというか、こういう方法もあるというご提案はないか。

（小川委員）

・　時期的にはもう決めないといけないということか。

（木元座長）

・　そうである。６月２８日にやりたいと考えている。

（小川委員）

・　もう１カ月と少ししかない。

（木元座長）

・　市民参加懇談会への期待感から言っても、やった方が良いと思う。その場合、５月３０日には決定したい。テーマとか場所とか人とか、そういうものを決めたい。

（小川委員）

・　そうすると、意見集約が難しい感じになっているので、座長に一任してご決断いただくということになるのではないか。

（木元座長）

・ 小泉首相のような気分になってきた。
（小川委員）
・ 私は両方意味があると思う。ただ、敦賀でやる場合に関しては、個人的にはもう少し遅い方がいいという感じがし、東京でいろいろなイベントがあるだろうと思われるこの時期に東京でやるというのも良くない気はする。東京の場合、なぜ東京ばかりなのかと思われるかもしれない。
（木元座長）
・ 東京ではなくて埼玉とか、そういうところになるだろうと思う。私は東京でやるのは得策ではないと思う。
（小川委員）
・ 横浜とか。
（木元座長）
・ 問題は、私はどうしてもこのテーマで、どの顔を思い浮かべて公募をかけるかが…
（小川委員）
・ 対象がよくわからない。
（木元座長）
・ ちょっと私としては自信がない。先ほども延々申し上げたのは、正直言って私には、一種の切り込み隊長的感覚があった。問題があるところにザクッと切り込んで行って、本音を聞きたいという思いがあった。
（中村委員）
・ それは木元座長の本質だろう。
（木元座長）
・ 今度もいろいろなご意見があるけれども、共生するとはどういうことなのかということを、究極的にはお互いが納得し合いたいという思いがある。そうすると、消費地の人間であってもそれを知らなければいけないと思う。
（小川委員）
・ 時間的に考えるとご一任というふうにさせていただいて、その結果に対してコアメンバーとして最善の努力をするということしかないのではないかと思う。
（木元座長）
・ ありがとうございます。ご意見あればぜひいただきたい。
（碧海委員）
・ 私は敦賀市と考えると、結構狭いと思うんですよね。狭いから結構利害関係等が相当あって、私は先ほど地元の心情がちょっと気になると言ったけれども、そういう感じを受ける。周辺も含めて、もう少し広い範囲で、原子力に関係のある人たちとない人たちがいるわけだから、刈羽の場合でもそういう話が出てきましたけれども、結局そういうことが出てこないと、敦賀市でやっても意味があるのかなという気がする。
（木元座長）
・ 敦賀でやれば、恐らく「もんじゅ」をやると思われるだろう。「もんじゅ」を言葉に出さなくても原子力委員会ならば、高速増殖炉のことは考えるだろうということで、公募をかけると、これは九州から北海道まで来ていただいて良いわけだから、

恐らく批判的な意見を持っている方がお出でになるだろうという予測は立っている。別件だが、「もんじゅ」の裁判の件に関して、原子力委員会と対話をしたいと申し込みがあったが、その方たちもいらっしゃるかもしれない。

（碧海委員）

・　裁判になったのはとても専門的な問題である。

（木元座長）

・　裁判の中身を議論するのではなくて、その存在そのものを問うという意味で捉えるということである。だから高速増殖炉を含めて、核燃料サイクルというものの意味をそれぞれがどう捉えていて、必要性を感じているのか、感じていないとすればどういう形のエネルギー供給の形を将来的に考えたらいいのかというところまでいけると思う。それを受けとめている地元が敦賀市ならば、それをどうとらえて、自分たちがどう共生していくのか、あるいは暫定的に受けとめるだけであとは共生したくないというのかだろうと思う。そうすると、それは市の自立につながってくる考え方でもあることになる。

（井上委員）

・　上告をされているということとの関連性はどうなるか。

（木元座長）

・　それについては文部科学省が説明会を開く。

（井上委員）

・　市民懇の場で開くのか。違うところか。

（木元座長）

・　違うところでおやりになるご計画がある。この市民懇とは違った形で、文部科学省がおやりになるというお話を伺った。市民懇は説明会ではないので、ご質問で、上告がどうなっていて、どういう形でするか、何に対してするか、どの部分に対してするかという細かい話になった場合、我々はお答えできないから、敦賀でやる場合にはそういう場合の対応として文部科学省にも参加をお願いしなければならないかなと思っている。青森でやったときには、日本原燃に来ていただいた。漏水の問題も多分出るだろうと、そういう展開を考えスタンバイはしてもらう。それから、当然この場合には、保安院にも来てもらうことも考えなければならないかなと思っている。

（中村委員）

・　聞きたいことがあるというのが最終的なファクターだと思う。私は、首都圏で聞いてみるということに非常に興味はあって、手法としては先ほど申し上げたようなもので実施して、参加性を高めるしかないと思う。その場合、第２部で覚悟しておかなければいけないのは、多分バラバラにいろいろなレベルの話が出るだろうということである。何も関心がなかった、というところからもうちょっと突き詰めて、碧海委員が言われたように、そういう情報が伝わっていなかったとか、元々あまりそういうことには普段から関心を持っていないとか、それはそういうことだろうと思う。井上委員が言われるように、もう少しアウトサイドにいる人が来てくれたら、そんなレベルかとか、そんなふうに考えているかとか、そんなふうに考えてないのかとかということを知る、ということはできそうなので、これは「仕掛け」を用意

すれば引出せる可能性はあるかなとは思っている。

- 第１部に、この人の話なら聞いてみたい、と思わせる方に出ていただく。誰が、というのはまた次のこととして、第１部、第２部の役割、この間も皆さんで確認したけれども、第１部の、問題提起とか第２部のための話題作り、意見を引き出すためのきっかけ作りをとても強調した第１部というふうに考えれば、ある程度反発意見が来るのを覚悟の上でどんどん言ってもらうとか、言ってくれる人とか、あるいはパネルディスカッションでかなり論点を鮮明にして、こんなものは知らないのが悪いのではないかとか、知りたくたってどうやって知ったらいいんだというようなことが出てきて、それを受けて第２部で私もそうだというところから出てくるというのは、この間の青森の幼児をお持ちの若いお母さんのような方が出てくるというのは、広く見ると我々が目指している広聴の大事な部分だと思う。
- ただ、それでねという話をどうしてもしなければならなくなるので、そうするとレクチャーの要素があるから、これは違うスタイルでやった方が良いと思う。ただし、このテーマは非常に魅力的というか…

（小川委員）

- タイムリーである。

（中村委員）

- そこが魅力なんですけれども、最初のスタートに戻って言えば、市民参加懇談会がそういうのを開いて、何を期待しますか、何を求めますかということになると、ちょっと違うかなと思ってしまう。そうすると、切り込み隊長が言われるように、明確に知りたいことを持っていける方が、その期待に応えるかどうかは現地の話ということになるが、そういう方が市民参加懇談会としては向いているのかなとは思う。

（木元座長）

- ありがとうございます。どこに決まるにしても今日決めたいのは、６月２８日に行っていただく方は全員行っていただく。そしてその中から第１部の司会は中村委員にやっていただきたいと思っているし、第２部の方は吉岡委員はこの間１回やっていただいて、碧海委員は２回やっていただいて、井上委員が１回だから、そうすると吉岡委員と井上委員かなという思いもある。

（中村委員）

- 福井県はやはり井上委員だと思う。

（木元座長）

- そう思う。井上委員もご自分で会を持っていらっしゃるから、市民懇での声をピックアップして、ご自分の会に反映させるということもできるのではないかという、お頼りしたい考えもあった。
- しかし、これは合議制というか、コアメンバーの皆様のいろいろなお話を聞きながら、一番良い方向にまとめ上げるのが私の責任だと思っている。今日、小沢委員がお見えにならなかったのは大変残念だが。

（碧海委員）

- そういう埼玉とか千葉とか、そういうところでやるとしたら、それこそ前半で高木委員や小沢委員に出ていただいたら良いと思う。中上さんとかね。

（中村委員）
・　パラレルでやれれば一番良いが、首都圏についてはまだ不明確な部分があるものの、魅力的な部分も確かにある。
（碧海委員）
・　私たちはそういうことを頻繁にやっているから、関心のない人から意見が出ないことについては心配していない。むしろイメージは結構ある。第２部で皆さんが帰ってしまうなどというようなものではないと私は思っている。
・　事務局の方で、敦賀でどういうテーマで、どういうパネリストでやるという案を、たたき台として出してくだされば、それについて意見、コメントを出させて頂く。
（木元座長）
・　今２つの案が出ていて、首都圏の方で言えば停電問題をやる場合に、大宮等もあるが、ほかに候補地ありますか、横浜、大宮以外で。
（中村委員）
・　さいたま市、あとは政令指定都市だと千葉がある。
（小川委員）
・　火力発電所をたくさん抱えている横浜が良いと思う。
（中村委員）
・　発電所を全然持ってない埼玉県とか。送電線しかない、あとは消費しているだけという埼玉県というのもなかなかおもしろい。
（碧海委員）
・　前橋市とか甲府市とか、そういう規模でもよいのでは。横浜はシンポジウムとかフォーラムが多いから、ちょっと目立たないという気はする。
（木元座長）
・　今日は２つの案をいただいたと解釈する。私は条件的には敦賀に傾いていたが、敦賀の案として、どういうテーマかとか、相手方のこともありますから、相手方にも聞く。
・　関東周辺の案として、横浜か埼玉か千葉、それから前橋、いろいろ意見が出ました。それを調べてみます。そこで、この東電の停電問題に関して、首都圏でどういうイベントがあるか、キャンペーンをどうやるのかというのを調べる。昨日出席した話し合いの中では、かなりテレビでやるとのことだったので、市民懇を６月２８日にやるときに、その鮮度というか、インパクトの度合いがどうなのかということと、それから広報の仕方もちょっと考える。
・　そういうことで、私に預けていただき、こちらで案を作成して良いか。
（中村委員）
・　碧海委員が言われるように、ある程度のたたき台の案を出していただければ。
（木元座長）
・　それをファクスか何かでお送りして構わないか。
（中村委員）
・　メールでも構わない。
（木元座長）
・　それと、今までのやり方だと約２００人ぐらいを対象にしているが、首都圏の場合

も規模はそれぐらいで良いか。今、会場が空いているかどうかという問題もあるが。

（中村委員）

・　首都圏の場合は特にその問題はあると思う。

（木元座長）

・　そういうことでやらせていただいて、そのときのコーディネーターを決めさせていただきたいと思う。追ってそれはお知らせする。

（３）その他

（木元座長）

・　今日は候補地を挙げた。その次の市民懇についての検討も並行してやらないと、この段階でも、ぎりぎり６月２８日にやるのが間に合うか間に合わないかとなっている。次にどこで開催するかということも決めておかないといけないので、例えば今日たまたま開催候補地というペーパーがありますので、次はどこが妥当か。先ほど鹿児島が出たので、鹿児島も一つの案である。それから、福島という案も最初から出ている。消費地の方で、先ほど小川委員がおっしゃった魅力的な広島とか愛知とか香川等が候補地。

（小川委員）

・　やはりいつもいつも受け入れ慣れているところばかりではいけないとも思う。国民全体の意見というのを対象にしているということで。

（木元座長）

・　原子力に関わる課題を抱えているところではなくて、そうでないところもあって良いのではないかということか。

（小川委員）

・　そうである。姫路だとか広島。

（木元座長）

・　今日のペーパーの地名以外で何かあったら、次のコアメンバー会議のときにまたご提案いただきたい。また事務局でも考える。

・　時期としては６月の次は大体何月ごろが良いか。６月の終わりの次だから９月…

（中村委員）

・　７月にすぐやれれば良いと思うが。

（木元座長）

・　市民懇を６月２８日に開催したいので、次回のコアメンバー会議はその２週間ぐらい前になるとして、６月９日の週に開催したい。

（中村委員）

・　候補地には、横浜、埼玉、千葉というのも入れておいたらどうか。

（木元座長）

・　入れる。今回の２つの案のうちの一つだけれども、ここにも入れる。

（中村委員）

・　もちろんそれは物理的に難しいでしょうけれども、できれば７月にもう一回できれば良いと思う。

・　首都圏の中核都市というのは、テーマは何であれ一応候補地として残しておいてほしい。特に先ほどのお話からいくと、テーマとして、もっと幅広くエネルギー教育等を含めた日本のエネルギーを考える中での原子力というものもいつか必要な感じはある。首都圏では東京というのはいろいろなことが多いから、開催地は周辺の１００万都市かと思う。

（木元座長）

・　それもここに追加する。

（小川委員）

・　今日のコアメンバー会議の結果が一応はマスコミに出るだろう。そのときにこういう今までやったことのない中堅都市の名前も挙がったとぜひ書いていただいて、対象の都市の方があれ、何ですか等と、やりとりができる環境を作っておくというのもとても必要だと思う。

（木元座長）

・　ファクスなり何なりでお諮りする。

・　もう一つご了解いただきたい事項がある。それは次回どこかでやるにしろそれをビデオに撮りたい。市民参加懇談会を紹介できるビデオがない。それを撮ることをコアメンバー会議でご了解いただけるか。

（犬塚参事官補佐）

・　コンパクトに市民参加懇談会の活動を紹介するような、アピールするようなビデオを作ってはどうだろうかということである。今、木元座長より紹介があったように、地元自治体にご説明に上がる際にそれを使用するとか、そもそもインターネット上で市民参加懇談会の活動というものをご理解いただくということに使うとか、そういうものに使うという意味で、今まで撮ってきた市民参加懇談会の会場の映像とか、それからまた先ほど申し上げたように次回ぐらいになるかもしれないが、コアメンバー会議の映像とか、資料映像をうまく組み合わせて紹介するようなビデオを作ってはどうかと思っている。

（木元座長）

・　それはよろしいか。

（中村委員）

・　結構である。

（木元座長）

・　ご了解いただければ、もちろんそのときにご出演いただくパネリストの方々には、その都度ご了解を得る。

（碧海委員）

・　中村委員は５月２７日の午前中のご都合はいかがか。原子力委員会への報告がある。

（木元座長）

・　ご報告を出さなければいけない。原子力委員会の定例会議が火曜日である。今日のコアメンバー会議の報告をするのが来週になるが、５月２７日である。ご都合はいかがか。

（中村委員）

・　２７日は、１４時ぐらいまでに上がれば大丈夫である。後でご連絡いただければ。

（碧海委員）
・　私はお昼から都合が悪い。
（木元座長）
・　中村委員は６月３日の午前中はいかがか。
（中村委員）
・　３日は全然大丈夫である。
（木元座長）
・　その辺勘案してお諮りする。
・　コアメンバーが今日も少ないこともあり、追加ということで候補を挙げさせていただくので、次のときにお諮りするが、例えば青森で出ていただいた蟹瀬氏とか、読売新聞をおやめになって、論説委員からフリーになられて、この間エネルギーフォーラム賞をおとりになった新井氏とか、読売で今フリーの東嶋和子氏という方がいらっしゃる。そういう方の名前も挙がっているが、異存はないか。では、交渉させていただくようにする。
・　皆様のご都合について、なるべく早いうち、今週中にもお出ししますので、○×でご回答よろしくお願いする。△でも結構である。後で変更可能である。
・　私がお預かりした分はまた事務局といろいろ調整いたしまして、ご報告させていただきますので、そのときにはよろしくお願いいたします。

○これまでの活動の取りまとめをコアメンバーから原子力委員会へ報告するため、事務局より後日、ＦＡＸ等で各委員の予定を再確認して日程調整することとなった。

○本日の議論を踏まえて、事務局にて次回６月２８日の市民参加懇談会の開催計画案について、敦賀および首都圏近郊の政令指定都市の２案をたたき台として作成し、後日、ＦＡＸ等で各委員にお諮りすることとなった。

○次回のコアメンバー会議は、６月９日の週を目処に調整することとなった。

以　上